
臨床談義：松木邦裕とのQ & A

学会では聞けない質問を松木先生にぶつけてみた

岩倉 拓, 佐藤幸江編

金剛出版, 四六判 240 頁, 3,520 円, 2025 年 11 月刊

(ノートルダム清心女子大学／関西心理センター)

日下紀子

「学会では聞けない質問を松木先生にぶつけてみた」とは、いったいどんな質問なんだろう？ 思わず本書を手にとってしまうだろう。学会ではもちろん、セミナーでもスーパーヴィジョンでもなかなか聞けない質問が本書にはたくさんつまっている。本の中に入る前に、まず装丁のソフトなイラストに惹きつけられる。この絵はいったい何を意味するのか。その扉をあけると、笑顔の松木先生がそこにおられる。思わず微笑んでいる自分に気づく。そして表紙のイラストの意味が次第に明らかになる。

序文では、岩倉先生が「臨床談義」に至る道のりを書いてくださっている。「笑いが起こりながら生きること自体に関する想いが去来する時間」を本書を読みながら私も味わった。「今までの自分の人生や臨床実践を振り返り、何が大切なのかを考えさせられ」た。「学会や講義の松木先生とは異なる“松木体験”を皆さんにもシェアしようと思い立ち、本書にまとめ」てくださった岩倉先生には感謝の気持ちでいっぱいである。なかなか自分一人では思いつかない質問、思いついてもなかなか松木先生にぶつけることができない質問がここにある。私たちは、自分の生きるそのときどきによって、ページをめくる箇所が違うだろうが、そのたびごとに松木先生に出会うことができる。

目次は、松木先生への58個の質問の一覧である。【ひと・松木邦裕編】、【精神分析理論・実践編】、【臨床実践編】の三つの部門にわかれている。臨床実践で悩んだときに、松木先生だったらどうするのだろうか？ 何とおっしゃるだろうか？ と、いつでも松木先生の言葉に辿り着くことができる。なんといっても、松木先生の声がリアルに聞こえてくるようにここに響いてくる。本書から私は、これまで私が知っていると思っていた松木先生の像を超えて、

「あーそうなんだ」「それはどうしてだろう?」「あれはそういう意味だったんだ」と、改めて松木先生とその場で対話をしているような感覚を味わうことができた。

また、かつての私自身の体験が蘇える質問があった。それは質問26である。20年を経た現在でも、この回答の最後の言葉「子どものあり方に責任を持つ親という姿勢を持たないことには、患者／クライアントに責任を持つ治療者にならないだろうという発想」は重みをもって響いてくる。当時は親としても必死だった自分は、治療者としても必死であり、その両立に悩んでいた。松木先生の言葉は耳にこちよいものばかりでは決していないが、一人の人として、そして臨床家として身も心も引き締まるものである。

本書からは、自分では気づくことができなかった問いや、自分と同じように悩んでいる人がいることを知ることができ、改めて同僚の大切さを感じるとともに、本書を身近に置いておきたいと思う。松木先生をご存知の人もそうでない人にも、ぜひ手に取って日々の臨床実践と生活に活用していただきたい。
